

<2 月総評>

不安定な世界情勢を思わせる作品がチラホラとしてきました。こういうとき言葉はどう動き、どんなふるまいをするのか。目が離せません。しかし、どんなテーマやどんなモチーフでも、優れた作品にはすべてに通底する、社会に対して訴えるものがあると信じます。

<作品>

仲直りせず初雪を赤い靴

長谷川柊香 宮城県

——赤とは決意を表す色。揺れる心を振り払って、純白の初雪に一步を踏み出す。

好きだとは言えない

距離に落ち着いて

手持ち花火を見つめるばかり

さいう 愛知県

一言えない距離を選んだのは自分自身か、そうさせた相手なのか。少しでも動けば火玉は落ちる。膠着状態の心理を表す花火の比喻は見事。

じだんだをうまく踏めない

いもうとが

抱きしめている

かいじゅうずかん

さいう 愛知県

—本人にも分からない幼い欲望を表すものとして、妹が抱いている「かいじゅうずかん」はこれ以上無いほどの確なものだろう。

糖衣

世界が比喩であふれていく

立花ばとん 東京都

—なぜか言いたいことが言えず、砂糖でくるんだような表現があふれる現在の世界。この場合の「比喩」は世界をズラすために使われる甘い言葉にぴったり。

殻の中から

わたしの心を手渡して

信じるときは赤鬼になる

豊富 瑞歩 茨城県

—固く守った殻の中から無防備で柔らかい果実のような心を手渡す。もし裏切られれば鬼になるだろう。

短詩縦書き重力をいかになく

中矢 温 東京都

—世界の言語の中でも今や縦書きは珍しい。漢語さえ正式表記は横書きの現在、日本語の詩は下へ下へと覆うように重力を増していく。

門壊れドアが叩かれ獣来る

その瞬間に弾丸込める

小林紅石 埼玉県

—専守防衛とは不思議な言葉だ。反撃能力も同じく。そのとき言葉はどこにどうしている。

難しい方の「お」です、

そう「を」です。

しゃがんで蟻を見てみたいな

マズルカ 山口県

—楽しい発見。象形文字が母語でよかった！

ゆっもらも ゆもっも

と花震わせる

あおむしの幽霊のうたたね

永山 逢海 神奈川県

—オノマトペもここまでくると幽霊になってしまう。

(1945年を何度でも)

ぬぐいつづける夏のスノップ

大嶋 碧月 石川県

—敗戦を終戦と読み替え、マスコミの記事は例年まったく同じに見える。

しゃぼん玉とんで
ふれてはならぬもの

土田 真央 滋賀県

——完璧に美しいゆえに触れられないもの。有るけれども所有できないもの。

菜箸の上の方持つ雪女

菊池 洋勝 栃木県

——菜箸の持ち方だけで、超自然の存在である雪女の姿をここまで彷彿とさせる。俳句の力に改めて感嘆。

夢またの名呪いまたの名春の泥

白石 孝成 広島県

——そうありがたい夢の自分と、あらねばならないという呪い。春の泥のようにぬかるみ、夢であるだけに至るところで足をとられる。